

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第828号 平成26年10月31日

蝸の記

「蝸の記」は、現在劇場公開されている映画の題名で、原作は、葉室麟による同名の時代小説です。

小説「蝸の記」は、2012年の第146回直木賞を受賞した作品で、一人の人間の清廉な生きざまと、彼を支える家族や自分を監視するために送られて来たはずの若者との師弟愛にも似た人間関係を、静かなタッチで描いています。

原作を読んで映画を見ると、大抵、自分の持っている原作へのイメージが、監督にタガをはめられた感じがして、見終わった後で反省する事がしばしばありますが、今回は、映画もまた重厚で、余韻を感じさせる素晴らしい作品であったと感じ入ったところです。

既に原作を読み、映画をご覧になった方もいらっしゃると思いますが、あらすじを簡単に紹介したいと思います。

檀野庄三郎は、城内で刃傷騒ぎを起こし、切腹は免れたものの、家老の中根兵右衛門から、向山村にいる一人の男の監視を命じられます。その男は戸田秋谷で、7年前に、藩主の側室と不義密通し小姓を切り捨てるという事件を起こし、今は亡き大殿から、10年後の夏に切腹する事、それまでに家譜を編纂する事を命じられ、家族と共に城下を離れた僻村で生活していました。

庄三郎は、秋谷と寝食を共にしながら家譜の編纂を手伝う内に、監視役の立場を超えて秋谷の人柄に惹かれ、次第に秋谷の無実を感じ始めます。

庄三郎は秋谷を救うべく真相を探り始め、遂に、7年前の事件の裏に隠された重大な事実に向き合い、秋谷の側室との不義密通は仕組まれた冤罪である事が分かります。

しかし、秋谷は、大殿との約束を果たし、従容と死を選ぶのです。

私が、塾頭通信で「蝸の記」という作品を取り上げようというのは、これが単な

る娯楽時代劇ではなく、人は如何に生きるべきかという重たいテーマを私達に投げかけていると感じるからです。

ところで、「蝸」というのは、蟬の一種で、我が国ではその鳴き声からカナカナ等とも呼ばれています。また、蟬は、成虫として地上で生活する期間はせいぜい1か月程度と短く、誠に儂い存在です。

秋谷は、自身の日記を「蝸の記」と名付けていますが、この事を庄三郎から尋ねられ次のように応えています。

「夏がくるとこのあたりはよく蝸が鳴きます。とくに秋の気配が近づくと、夏が終わるのを哀しむかのような鳴き声に聞こえます。それがしも、来る日一日を懸命に生きる身の上でござれば、日暮らしの意味合いを込めて名づけました」

この、与えられた一日一日を大切に愛おしみ、懸命に生きる、これは作品全体を包み込むモチーフといえるでしょう。

私達は普段、これから先の寿命の事等殆ど考えずに生活していますが、もしもガン等の病気のために、医者から「余命何年」と突然宣告されたら、皆さんなら一体どうされるでしょうか。

健康な人は、自分の死に現実感はないと思います。恐らく、明日以降も今日と同じように続くだろうと、無意識の内に感じているのではないのでしょうか。

こうした中で、医者から余命を宣告されるというのは驚天動地の出来事です。何故なら、自分の意識の中にはなかった「終わり」が、突然現実のものとして目の前に突き付けられる事になるからです。

まだまだ生きて行けると何となく感じていたのに、医者から突然「あなたの寿命は後何年」と宣告されたら、誰しもきっと動揺するでしょう。しかし、考えてみると、医者から余命を宣告されるという事は、今まで漠然としていたものが明確になるという事です。期間の長短はあっても、自分に与えられた期間（残された期間）が具体的なイメージを以て示されたという事でもあります。

だから、その期間、つまりその日が来るまで人としてどのように生きるか（生きたか）は、人としての真価が問われるという意味で誠に重要であり、また、自分自身としても、その期間を納得して生きる事が出来れば、恐らくは生きて来た甲斐もあったといえるのではないのでしょうか。

秋谷が、冤罪である事を承知の上で切腹するのは、藩を守るという大義のためです。現代の倫理観では受け入れ難いものですが、秋谷は、7年前の事件の際に失っていたはずの命に決着を付けようとしたのかも知れません。

また、秋谷は何故、10年後に死ぬ事が分かっているながら「藩譜」の作成に心血を注いだのでしょうか。それは、単に大殿からの命があったからというだけではないと思います。彼は、正しい歴史を掘り起こし、事の真実を記録する事で、後世の

人々がその歴史から学び、藩政を正しく導いてくれる事を願っていたに違いなく、それもまた、彼にとっては大いなる大義だったはずです。

それにしても、秋谷を演じた役所広司は格好良かったです。

教師が、教え子との間でメールのやり取りをしているうちに親密な関係になり、結果わいせつ行為等に及び、厳しく処分されるといったケースが後を絶ちません。

こうした中で、埼玉県教育委員会が県立学校の全教職員に対し、昨年 12 月 22 日付で、生徒との間で、メールや無料通信アプリ等による私的な連絡を絶対に行わないように等とする通達を出し話題となりましたが、北海道教育委員会においても、先般（3月27日）、「職員と児童生徒との連絡手段の適切な取り扱いについて」通知がなされ、事故防止に向けた取り組みを促しています。

この通知は、携帯電話や電子メールの活用を一切禁止しようとするものではなく、各学校において、その適切な利用や管理に関する校内規定を整備するよう求める内容となっています。また、校内規定を設ける際の留意事項として、教師と児童生徒との間でのメール等による私的連絡を禁止するとした上で、教師と児童生徒との連絡内容の範囲を明確化するように指示しています。

こうした教師と児童生徒とのメール等による私的連絡は、北海道のみならず広島県や岡山県等でも禁止されていますが、にもかかわらず、各地でメール等を介在した不祥事が後を絶たない現状は極めて深刻だと思えます。

学校のコンプライアンスを専門とする日本女子大の坂田仰教授は、メールや無料通信アプリについて「一対一のやり取りになりやすく、わいせつ行為の温床になっている側面もある（2月21日付日本経済新聞から）」と指摘していますが、教師と児童生徒がメール等で親しくやり取りしているうちに、超えてはならない一線を見失ってしまうのかも知れません。

メール等を使用して仲間どうしで連絡を取り合うというのは、今や当たり前の世の中になっており、個人と個人がメールのやり取りを通して親しくなるというのは、別に教師に限らず誰にでもある事です。

しかし、教師の皆さんが忘れてならない事は、メール等のやり取りをしている相手は心身の発達段階にある子ども達だという事です。そうした発達段階にある子ども達を支援すべき立場にある教師が、師弟関係の一線を越え、教え子との間で不適切な関係に陥ってしまう等という事はあってはならない事であり、決して許されるものではありません。

教師と教え子が信頼関係を築くという事は重要ですが、その信頼関係はあくまでも師弟関係を土台としたものでなければなりません。日々接していれば、互いに気心が知れるという事は当然ありますが、そこには、師弟関係という「超えてはなら

ない一線」があるはずで、この距離感を間違えてしまつては、厳しく処分されるのも致し方ありません。

人と人との距離感の取り方は、一筋縄ではいきません。特に、教師と教え子との間ではなおさらです。

この距離感について、外山滋比古氏（1923年生、言語学者でエッセイスト、評論家）は、「3尺の影」という一文の中で、次のように述べています。

教育とは教師と生徒との距離において行われる精神の秘儀である。

生徒と遊ばない教師は“封建的”と見られるのではないかと勝手に気をまわして、生徒とたわむれるあわれな教師が続出した。そんな先生は、生徒にとっても結局はおもしろくないのである。

教師というクルマと生徒というクルマには車間距離が必要で、それをあまりつめると、どちらにとっても危険が起こる。すばらしいドライバーなら生徒の前でカップシを踊っても尊敬を受けられであろう。しかし、凡人はそんな真似をしてはいけない。適正な車間距離を取り続ける努力が必要である。

昔の人はこれを“3尺下がって師の影をふまず”ということわざで言いあらわした。今の世の中でこんな事を言おうものなら、頭がどうかしたかと疑われる。

こうなったら、教師の側で自分の影をふませないように3尺の距離を置く事を考えなくてはならない。

（エッセイ集「親は子に何を教えるべきか」から）

この「3尺の影」という一文は四半世紀以上も前に書かれたものですが、まるで今日の惨状を予見しているかのようです。

距離感が旨く取れないドライバーは、もう一度教習所で実技講習を受けた方がよいと思います。特に、免許取り立てのドライバーには、改めて車間距離を取る事の重要性、車間距離の取り方をしっかりと認識して欲しいものです。

（塾頭：吉田 洋一）